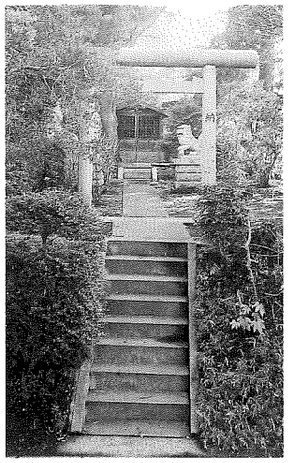
わがまち笠御嶽講の歩み

横浜市旭区笠御嶽講講元　嶋﨑迪夫

笠御嶽講は、旧笠地区であった横浜市旭区川島町、西川島町、鶴ヶ峰一丁目、二丁目の地域で、横浜市の郊外にあります。

昭和三十年代初めまでは農村地帯で、農家が点在しておりました。現在は都市化の波が押し寄せ開発が進みましたが、まだまだ緑が散在しています。

笠御嶽講がいつの頃から存在していたかは、確かな記録がありません。云い伝えによりますと、明治初期に村の若者一人が、数キロ離れた町(保土ヶ谷)に奉公に行って、そこに御嶽講がありました。若者は自分の村にも講をひろめたいと思いたち、地元の人々に勧めて、農家を中心に約七十戸で笠御嶽講を発足させたとのことです。



また同じく明治の頃と言われていますが、地元禅導寺境内に笠御嶽社を分社として建立し、現在でも講でお護りしています。終戦まで、町内の出征兵士見送りは、笠御嶽社境内で行っていたことを、今では懐かしく思い出されます。

昭和十五年頃までは毎年二月頃、御嶽から御師さんが来講され、二泊して当講はじめ近隣地域を訪問し、春には講員が数人交代で、一泊して代参をしておりました。大戦に入り講活動がいったんは中断しましたが、昭和二十二年から御師さんの来講が復活し、二十年代半ばには代参も再開されました。しかし、昭和三十年代半ば頃になると、地域周辺は急速に人口が増加したことと共に、生活環境も急変し、代参が中断するようになり、講としての動きが鈍くなりました。

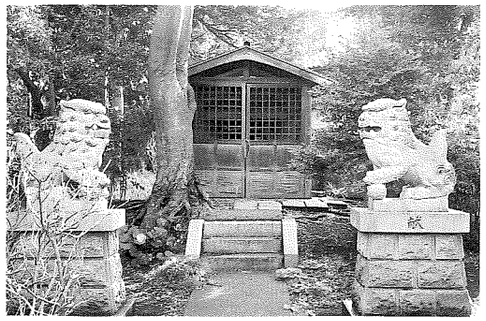
このような状態がしばらく続きましたが、近隣地区では講活動が盛んで、毎年講員揃って御嶽に参拝していることを仄聞(そくぶん)し、有志の者が講の復活を呼びかけました。そして昭和五十一年に、三十軒で再び御師の服部八郎氏のお世話になり、笠御嶽講が再開されました。その記念に講員一同で御嶽に参拝するとともに、その翌年に笠御嶽社鳥居の建替工事を行い、代参も復活しました。

しかしこの鳥居は木製であったため、しだいに老朽化し、平成二年講員篤志家(小金井兵之輔氏)の奉納による石造り鳥居となり、その後狛犬も奉納され、境内が見違えるように立派になり、時折はお参りに来る人もあります。

なお、地元では講に再加入しないで、個人の立場で御師さんの来訪を受けるものが、約四十軒あり御嶽との絆を強くしています。

そして代参が再開されると、御嶽に当講の石碑が無いのが淋しい、何とか建碑を考えてみようとの声が大きくなりました。その結果、御即位の御大典を記念して、平成三年五月に記念碑を建立することが出来ました。除幕式には、講員一同と地元笠はやし保存会が参拝し、獅子舞を奉納しました。

世の中の移り変り、世代交代、社会生活の多様化したことにともない、御嶽講のあり方も変革しながら、日常生活に溶け込んでいっております。



平成十七年 酉年式年大祭記念事業

当社では、酉年式年大祭を記念して左記事業を計画し、順次工事を行ってまいります。この事業の趣旨にご賛同いただける方は、随時ご寄進を受け付けております。

講中関係の皆様は主幹宮司に、崇敬者の方は社頭にてお願いいたしております。

一、大鳥居建替
一、避雷針新設(平成十三年竣工)
一、幣拝殿屋根銅板葺替
一、宝物殿外部塗装
一、随身門屋根銅板葺替
一、放水銃新設

第二十九回武蔵御嶽神社奉納俳句入選作品

選者　金子千侍

特選

一席　冬御岳一ッ目小僧の巣箱かな　練馬区手塚　昇
二席　背負籠に緋桃のぞかせ御師が来る　青梅市原島康典
三席　仏法僧鳴かずに低き星一つ　横浜市石井公子
四席　千年の欅の下の草紅葉　板橋区莇　賞太郎
五席　灯の海を遙るか下界にむささび翔ぶ　国立市井上まこと

秀逸(出句順)

御師の家春の氷柱が音もてり　日高市細川真水
手もみ茶や四十年を連れ添いて　日高市比留間幸江
お山風花の散り込む巫女溜り　入間市増岡蛍雪
御岳山展望台の十三夜　杉並区村上利雄
尾根跨ぐ己の高さに虹の立つ　入間市篠崎桂香
老庭師ゐて静かなる松手入　日高市小柳恍朗
斧始め谺返しの一打かな　飯能市森泉双輪
山頂に甲斐の風受く大夕焼　船橋市平栗瑞枝
霊山をゆらしてをりぬ釣舟草　豊島区紅林照代
邯鄲の闇が取巻く長屋門　羽村市下田雪子

佳作(出句順)

虻が止まりぬ絵馬の「健康第一」に　大磯町川村研治
少しづつ彩を違えて春動く　入間市田中よし
夏霧の社は静かに時刻む　蓮田市菊　正勝
玉あじさゐ玉解くまでの祈りかな　杉並区延平季子
山路は千草が飾る草紅葉　新宿区伊佐大蔵
瑠璃鶲朝日は靄の谷染めて　八王子市島田みつお
初御空神代欅の幹の張り　所沢市星野慶子
石組の粗密に霧の男坂　中野区辰巳行雄
あの顔は吉とあるらし初籤　入間市上原源治
秋麗や嶺と権現天に置き　川崎市清水安奈

応募総数　七七四句

選者吟

掌の中に吾が歳があり追儺豆

奉納俳句選評

特選一席

(冬御岳一ッ目小僧の巣箱かな)

空っぽの巣箱を〝一ッ目小僧〟などと滑稽、奇抜な表現をされ、凄く魅力的な作品になりました。もし掲句が巣箱そのもので詠まれたら、暗い冬のお山の実写でしかありません。併し、〝一ッ目小僧〟には夢と生々とした躍動感があり、この語句によって寒々としたお山のイメージが一変し、神域に暖かい漂いさえ感じさせていてくれるのです。言葉の持つ不思議な呪術性なのでせう。

特選二席

(背負籠に緋桃のぞかせ御師が来る)

御嶽神社の宮司様といえば、人格・見識総て全きをなす人で、神に最も近く仕える尊いお方です。その宮司様が、なんと野良着に背負籠を背負って、こちらへやって来られるではないですか。籠に緋桃の枝がささっていて、一寸粋だなあ、突然湧いてきた親しみ、宮司様もこんな時があるのかと、ほっとした思いだったのでせう。緋桃の効果抜群。

特選三席

(仏法僧鳴かずに低き星一つ)

仏法僧の啼き声を聞こうと、ずうっと耳を澄ませています。併し一向に啼く気配がありません。なぜ啼いてくれないのだらう。あの神秘的な声を聞きたくて、わざわざやってきたのに薄情な仏法僧め。じっと見詰める仏法僧のぬばたまの森。その森低く一等星の美しい輝き。まさに虚実皮膜の間に作者の心はあるのです。

特選四席

(千年の欅の下の草紅葉)

千年の樹齢をもつ欅のご神木。樹下には一年で朽ちる草紅葉。この千年の時の差をもった風景が一幅の名画のように表現されました。欅老樹は千年の歴史を物語り、短命な草紅葉は、今の世の時の流れを奏でております。矢張り、掲句の眼目は「草紅葉」で、これから句意が展開していきます。そして、千年の時空を燻し銀のように総轄された素晴らしい作品になったのであります。

特選五席

(灯の海を遙るか下界にむささび翔ぶ)

むささびは、前肢と後肢の間に張られた飛膜をもって、木から木へと一〇〇米位滑空するそうです。夜行性で、御嶽山上で翔びますと遙か下界の灯の海が、自分の胸の下に見えて雄大、爽快なのでせう。作者は、この情景を眺めていて、いつしか自分がむささびになってしまって翔んでいるのでせう。

第三十回 奉納俳句募集要項

一、作品は未発表に限る
一、受付けは指定用紙にて投句箱へとする
　(郵送等直接の受付は致しません)
一、締切りは平成十五年一月十五日
一、発表は平成十五年三月中旬